

血室に関する疑問

「熱血室に入る」⇒「期門を刺す」「小柴胡湯之を主る」（傷寒論太陽病下篇）

ことの始まりは、この条文で小柴胡湯が出てくることに、やや唐突な印象を受けたことである。期門は肝経の募穴（治療穴）であり、小柴胡湯は疎肝剤である。浅学の身には、下半身にある生殖器に関連した病態に対して、肝に関係する治療を行うことが理解できなかつた。当然、血室を肝とすると納得がいく。そこで、血室に関する先達の考えを調べた。

傷寒論・金匱要略の「血室」

- 1) 傷寒論太陽病下篇 143：婦人中風、発熱悪寒、経水適来、得之七八日、熱除而脈遅身涼、胸脇下満、如結胸状、譫語者、此為**熱入血室**也、当**刺期門**、随其実而取之。
- 2) 傷寒論太陽病下篇 144：婦人中風、七八日、続得寒熱、発作有時、経水適断者、此為**熱入血室**、其血必結、故使如瘧状、発作有時、**小柴胡湯**主之。
- 3) 傷寒論太陽病下篇 145：婦人傷寒、発熱、経水適来、昼日明了、暮時譫語、如鬼状、此為**熱入血室**、無犯胃氣乃上二焦、必自愈。
- 4) 傷寒論陽明病 216：陽明病、下血譫語者、此為**熱入血室**、但頭汗出者、**刺期門**、随其実而瀉之、濈然汗出則愈。
- 5) 金匱要略婦人雜病 1：傷寒論条文 144 に同じ
- 6) 金匱要略婦人雜病 2：傷寒論条文 145 に同じ
- 7) 金匱要略婦人雜病 3：傷寒論条文 143 に同じ
- 8) 金匱要略婦人雜病 4：傷寒論条文 216 に同じ
- 9) 金匱要略婦人雜病 13：婦人少腹満如敦状、小便微難而不渴、生後者、此為**水与血俱結在血室**也、**大黃甘遂湯**主之。

* 条文番号は、「傷寒雜病論」（日本漢方協会学術部編、東洋学術出版社）による。

血室に関する文献

<1790年（寛政2年）山田正珍：傷寒論集成>

血室謂胞。即子宮也。（張介賓類經。三焦命門辨曰。子戸者。即子宮也。俗名子腸。醫家以衝任之脈盛於此則月事以時下。故名之曰血室。○明程式醫穀曰。子

宮。即血室也。)金匱云婦人少腹滿如敦狀。小便微難而不渴。生後者。此為水興血俱結在血室也。可見血室。果是子宮矣。不則何以有少腹滿。小便微難之理乎。成無已方有執喻昌之徒。皆以為衝脈之異名。錢[彳黃]以為衝任二脈。希哲以為血分。皆非也。何者。經絡之說。仲景氏固所不據。且下條明言。此為熱入血室。其血必結。其指子宮而言者。益可以無疑焉。* ()内は小文字

*大意：衝脈説も血分説も誤り。子宮を指す。続けて、「鼻血や性器出血の後自然に治る条文がある」「期門や風池風府を刺すというが、桃核承氣湯や抵当湯ではどうして刺さないのか」と、衝脈説を強く否定している。

<1822年(文政5年)多紀元簡：傷寒論輯義>

案血室。方氏云。爲營血停留之所。經血集會之處。即衝脈。所謂血海是也。諸家皆從其説。只柯氏云。血室者。肝也。肝爲藏血之藏。故稱血室。以上並未明據。陳自明婦人良方云。巢氏病原并產寶方。並謂之胞門子戸。張仲景謂之血室。衛生寶鑑云。血室者。素問所謂女子胞。即產腸也。程式醫穀云。子宮。即血室也。張介賓類經附翼云。子戸者。即子宮也。俗名子腸。醫家以衝任之脈盛於此。則月事以時下。故名之曰血室。又案方注。原于明理論。

*大意：衝脈(=血海)説をとる者が多い。肝説ははっきりしない。子宮説が明解である。

<1851年(嘉永4年)浅田宗伯：傷寒論識>

(血室)之室、猶力室之室、弘指血道言之也、陳自明云、巢氏『病原候論』『產寶方』并謂之胞門子戸、張仲景謂之血室、張景岳從之、蓋此条及『金匱』大黃甘遂湯、以婦人標之、則以為當、然至陽明篇下血讖語而窮矣、夫邪氣陷入于血道而蕩其血、則在婦人至之於子宮而經水適來、在男子至之於腸胃而下血、亦不必一定也、他如「熱結膀胱」「熱在下焦」亦然、皆大概之法言耳、不可深拘而為之説也。

*大意：胞門子戸説あり。婦人の条に多いが陽明篇にもあるので、**婦人では子宮、男子では腸胃**か。必ずしも一定しない、あまりこだわらな。

<1868年(明治元年)森立之：傷寒論考注>

血室、子宮也。從子宮支出之脈爲衝任二脈、蓋子宮是根、衝任是枝葉也。吳氏以爲血室、一名血海、即衝任脈也。統言之耳。

* 大意：子宮である。衝任二脈は、根本である子宮から出る枝葉である。

* 以下に、主な中国人の解説を挙げてある。

呉氏：一名**血海**、即**衝任脈**也。

方氏：爲**營血停留之所**、**經血集會之處**、則**衝脈**、所謂**血海**。

只柯氏：血室者、**肝**也。肝爲藏血之藏、故稱血室。

陳自明《婦人良方》：巢氏《病原》并《產寶方》並謂之**胞門子戶**。張仲景謂之血室。

《衛生寶鑑》：血室者、《素問》所謂**女子胞**、即**產腸**也。

程式《醫穀》：子宮即血室也。

張介賓《類經附翼》：子戶者、即**子宮**也。俗名**子腸**。醫家以衝任之脈盛於此、則月事以時下、故名之曰血室。

<1933年（昭和8年）木村博昭：傷寒論講義>

血室とは**廣く血道**を指す。

<1965年（昭和40年）奥田謙蔵：傷寒論講義>

血室とは、子宮の謂に非ず。恐らくは血中、即ち**汎く血管系統**を指させるならむ。

<1966年（昭和41年）大塚敬節：臨床応用傷寒論解説>

註に、熱血室に入るとなすなり、とある血室を子宮と解する者が多いが、私は**肝**を血室にあてている。熱が肝に入ったのであるから、マラリヤのように、熱が発作的に出るのである。

<1969年（昭和44年）大塚敬節：漢方診療医典>

血室：血分、子宮にあてる人もある。

<1979年（昭和54年）大塚敬節：金匱要略講話>

「血室」とは子宮だという説もあるのですが、男の場合にも出てきますので、子宮では具合が悪いですね。現代医学的に考えると、血が一番多いのは肝臓だから、熱が**肝臓**に入ったと考えると、「小柴胡湯主之」が生きてくるわけです。

<1980年(昭和55年)劉渡舟：中国傷寒論解説>

血室の定義：血室について、ある人は衝脈であるといい、ある人は肝臓であるといっているが、多数の人々は胞宮つまり子宮であると定義している。胞宮には月経を主り、胎児を成長させる作用がある。「衝は血海なり」「肝は蔵血を主る」とあるように、血液の供給と栄養があつてはじめて正常なる月経と胎児の成長があるのである。それゆえ胞宮(血室)と衝脈、肝臓とは密接な関係にあることは、疑う余地もない。

<1984年(昭和59年)漢方用語大辞典>

血室：①衝脈のこと。《婦科経論》「王太僕いわく：衝は血海となし、諸経朝会し、男子なれば運してこれに行き、女子なれば停まりてこれに止まる。これを血室という。」②肝のこと。《傷寒来蘇集》「血室は、肝なり。肝は蔵血の室となす。故に血室と称す。」③子宮のこと。《類経附翼》「故に子宮は、医家、衝任の脈これに盛なるをもって、即ち月経時をもって下る。故に名づけて血室という。」

<1996年(平成8年)細野史郎：臨床傷寒論>

血室、即ち子宮。

<2003年(平成15年)鎌田慶市郎：傷寒論「熱血室に入る」についての一考察>

「血室」について、年代別に列举すると、

- 湯本求真、昭和3年、皇漢医学、子宮
- 木村博昭、昭和8年、傷寒論講義、広く血道(*前述)
- 杉原徳行、昭和31年、漢方医学、傷寒論編、経水適行、子宮
- 龍野一雄、昭和32年、和訓口語訳傷寒論、子宮及び附属器
- 森田幸門、傷寒論入門、昭和33年、子宮あるいは腸管
- 西山英雄、漢方医語辞典、昭和33年、子宮とも解されるが肝臓
- 奥田謙蔵、傷寒論講義、昭和40年、子宮だけではなく血管系統(*前述)
- 大塚敬節、臨床応用傷寒論解説、昭和41年、肝(*前述)
- 小倉重成、傷寒論評釈、平成3年、子宮
- 藤平健、傷寒論演習、平成9年、子宮及び血管系統
- 中国漢方医語辞典、昭和55年、子宮

と解釈している。

……

婦人が中風、軽症急性感染症に罹患し、発熱、悪寒がおきてきた。ところが、たまたま月経がはじまった。即ち熱邪が**循環器系**に入り月経を促した。月経が発来して7、8日すぎ少陽病期に入ったが、解熱して、それまでの浮脈が遅となり、身体が楽になった。これはやはり熱邪が循環器系に入ったためである。

<2008年（平成20年）森由雄：入門傷寒論>

婦人が中風にかかり、7、8日の後、発作的に悪寒発熱が起こり、月経（経水）が止まってしまう者は、熱邪が**子宮（血室）**に入ったからである。血は結ばれて、マラリア（瘧状）のように時々発作を引き起こす。この病態は小柴胡湯の主治である、というのが大意です。血室は、**肝という説**もあります。

<2008年（平成20年）高山宏世：傷寒論を読もう>

血室については歴代いくつかの解釈がなされていますが、女性の月経時に特有の病証ですし、一般に血室は古典では胞宮とされていますから、現代の**子宮**と考えられます。

用語

衝脈：奇経八脈の一つ。十二経脈のあつまる要所であり、諸経の気血の作用を調節する。胞中におこり、婦女の月経の来潮とは密接な関係がある。

任脈：奇経八脈の一つ。

血分：①血が存在する範囲のこと、②病名（ここでは①）

血海：①衝脈、②肝臓、③経穴名、④子宮（ここでは①）

血道：血管系統、循環器系のことか

胞門：①子宮口、②経外穴名

子戸：経外穴名

女子胞：胞宮、子宮

以上は漢方用語大辞典（創医学会学術部主編、燎原、2007初版1984）より
産腸、子腸：文脈から子宮

用語の考察

森立之の文献：ここでは文脈から、「血海」は衝脈（と任脈）、「胞門子戸」は経外穴名、「産腸」と「子腸」は子宮のことと思われる。

鎌田慶市郎の文献：木村博昭のいう「血道」から、血管系統や循環器系という考え方が導かれたのかもしれない。森田幸門のいう「(子宮あるいは)腸管」とは、産腸や子腸の字面からの連想かもしれない。

血室とは？

- 1) 子宮（胞宮、女子胞、産腸、子腸）
- 2) 肝
- 3) 衝脈・任脈（血海）
- 4) 血管系統

当初の疑問の回答

劉渡舟の文献から、子宮⇔月経⇔血と考えると、蔵血を主る肝と子宮とは密接な関係がある。従って、子宮に関連した病態ではあるが、血の異常を主に考えることで、肝に関係する治療が挙げられるのは、理解できた。

血室を子宮とする根拠

- ・ 傷寒論陽明病 216（＝金匱要略婦人雜病 4）以外は、婦人に関して述べられている。さらにその全てが、月経に関連した病態（傷寒論太陽病下編 143、144、145）か、産後の異常（金匱要略婦人雜病 13）である。
- ・ 月経が来た後に「熱血室に入る」ことから、血室は、出血した後空虚になった子宮と考えるのが妥当である（傷寒論太陽病下編 143、144、145）。「下血」も、子宮出血を含むので、同様に考えられる（傷寒論陽明病 216）。
- ・ 「上焦や中焦が犯されていないならば、自ずから愈える」＝下焦の問題である（傷寒論太陽病下編 145）。

血室を肝と考える根拠

- ・ 肝は蔵血の室である。血が一番多い臓器である。
- ・ 婦人の条のみならず、陽明病にも出てくる。
- ・ 「熱血室に入る」に対して、肝に対する治療を挙げている。

男性の場合は？

- ・在男子至之於腸胃（浅田宗伯：傷寒論識）
- ・血室を子宮として捉える場合、男性は前立腺が考えられる。（曾野維喜：東西医学よりみた金匱要略）

結論

どの説も、他説を否定するだけの根拠はない。そうすると、「血室を子宮とする根拠」の方が、説得力があるように思われる。

結局、張仲景に聞くしかないのかもしれない。

文献

- 傷寒雑病論『傷寒論』『金匱要略』三訂版、日本漢方協会学術部編、東洋学術出版社、千葉、2000
- 山田正珍：傷寒論集成、520-525、出版科学総合研究所、東京、1979
- 多紀元簡：傷寒論輯義、482-484、出版科学総合研究所、東京、1979
- 浅田宗伯：浅田宗伯選集第4集傷寒論識、323-326、谷川書店、東京、1987
- 森立之：傷寒論考注、573-575、學苑出版社、北京、2001
- 木村博昭：復刻版傷寒論講義、174、春陽堂書店、東京、1987
- 奥田謙蔵：傷寒論講義、170-171、医道の道日本社、神奈川、1979 初版 1965
- 大塚敬節：臨床応用傷寒論解説、312-313、創元社、大阪、2000 初版 1966
- 大塚敬節、他：漢方診療医典第6版、505、南山堂、東京、2007 初版 1969
- 大塚敬節：金匱要略講話、526-528、創元社、大阪、2006 初版 1979
- 劉渡舟：中国傷寒論解説、168-170、東洋学術出版社、千葉、初版 1983
- 漢方用語大辞典、創医学会学術部主編、296、燎原、東京、2007 初版 1984
- 鎌田慶市郎、他：傷寒論「熱血室に入る」についての一考察、漢方の臨床、50 (3)、423-424、2003
- 細野史郎、臨床傷寒論、223-226、現代出版プランニング、東京、1996
- 森由雄：入門傷寒論、118、南山堂、東京、2008
- 高山宏世：傷寒論を読もう、210-211、東洋学術出版社、千葉、2008
- 曾野維喜：東西医学よりみた金匱要略、537-538、南山堂、東京、2005